査読論文

進化（Evolution）と革命（Revolution）の社会主義

―ドイツと英国における社会主義的進化思想と J. A. シュンペーターのヴィジョン

小　林　大州介

星槎道都大学研究紀要

第 4 号

2023 年

The Bulletin of Seisa Dohto University
No.4, 13－28, 2023

査読論文

進化（Evolution）と革命（Revolution）の社会主義

―ドイツと英国における社会主義的進化思想と J. A. シュンペーターのヴィジョン

小　林　大州介

要約

本論文では，20 世紀の世紀転換期にドイツの社会主義者たちに議論されていた「進化」と「革命」という政党戦術上の対立を調べ，その議論がシュンペーターの後期の著書『資本主義・社会主義・民主主義』において果たした役割を考察する。進化という概念は，古くは啓蒙思想の時代から社会発展の説明に使われてきた。社会の「進化」は，キリスト教的な千年王国思想やユートピアニズムと結びつき，理想を追求するという「目的性」を強く意識する思想となった。そしてダーウィニズムが登場したのちは，社会主義者たちの間において，社会化を目的とする漸進的進歩を表す語として使われるようになる。穏健な社会主義者たちが民主的プロセスによる社会化を目指す一方で，能動主義者たちは自分たちの「合理的・理想的」な計画を実現するために，「革命」という実力行使をもって既存の秩序を打ち破り，現状の打開を図ろうとした。こうした二つの流れを受け継ぎ，20 世紀初頭のドイツの社会主義者たちの間では，社会立法によって漸進的社会化を推進する「進化」プロセスを重視するか，それとも現状を打破するため労働者に「革命」を促すか，という「進化思想」と「革命思想」をめぐる対立が生じた。

シュンペーターの著書，『資本主義・社会主義・民主主義』の背景的知識の一つとして，こうしたドイツ社会民主党内の対立の図式が存在したと考えられる。『経済発展の理論』において，企業者の革命的革新を「進化」の一過程として考え，暴力的な革命を拒絶する彼は『資社民』において社会主義への趨勢をもまた，進化の一過程として定式化した。

キーワード：進化　革命　社会民主主義　シュンペーター　マルクス

1．はじめに

英語の進化（Evolution）と革命（Revolution）という語は，ともに“展開”や“回転”といった“運動”を表す意味を共有している。経済学者が経済現象を「進化」と類推する場合，この語の意味を非常に広く捉ており，論者によってもその定義が様々であることが多い。しかし，ある程度一致を見せるのは，進化主体が内在的に進化する構造を持っており，そこから自然的・自動的に複雑性が発現する，という意味合いである。後者の Revolution は，文頭に Re が付くことで「再帰的に生じる」であるとか「繰り返し生じる」といった意味が付け足され，結果として「元の自然な状態に復帰する循環運動」（Hodgson 1993，訳，p. 62）を表す語になったという。しかし，この「革命」という語は単なる歴史の展開を表すだけではなく，歴史の連続的な流れを遮断するような大きな社会運動や政治的変革を含む，強い意味を含んでいる。

20 世紀転換期前後の英国とドイツにおいて，歴史の展開を「進化」的な現象として把握，説明することが流行し，この語は歴史学者や社会科学者だけではなく，社会主義者や共産主義者たちの間にも好んで使用されるようになった。さらにドイツでは，社会民主党の党内で歴史的発展が「進化」的であるべきか，もしくは「革命」的であるべきか，という極端な二項対立にまで発展した。革命の主唱者は，漸進的な「進化」思想では時間がかかり，彼らの目的を達成しえないと考えており，一部の能動主義者は武力を使用した暴力的な運動を是認する傾向もあった。他方で進化論者は基本的に「進歩主義者」であり，民主的な過程を経た改革を重視したが，しかし「社会主義」という大きな目標が達成される時期については，見通しを立てられずにいた。革命論者はこうした漸進的な進歩論者に，日和見主義的な優柔不断を見出し，非難を浴びせた。

本稿では，なぜこうした二項対立が出現したのか，またこの対立はどのように解消されていったのかを論じる。特に 20 世紀の初頭に英国とドイツという二つの思想圏に身を置き，それぞれの国の社会主義者と面識を持った J. A. シュンペーターが，この「進化」と「革命」という二項対立をどのように評していたかを考察する。

これまでのシュンペーター研究では，彼が「進化」と「革命」という概念装置をどのように自身の理論に組み込み，そしてそれぞれをどのように評価していたかについて論じられているものは少ない。シュンペーターの考えを明確にするためには，まず当時の進化観をよく把握し，どのような議論がどのような文脈の下に行われていたかを明確にしなくてはならない。また進化と革命に対するシュンペーターの評価は，彼の晩期の著作『資本主義・社会主義・民主主義（以下『資社民』）』（Schumpeter 1950）の背後にある彼のヴィジョンを明らかにする際，重要なヒントとなる。よって本稿の議論は，今後のシュンペーター研究にも意味のあるものであると考える。

「進化」と「革命」という概念を知るための先行研究として本稿の目的にかなったものをいくつか挙げると，まずE.ザーリン（1929）の『国民経済学史』がある。若干古いテキストではあるが，19世紀から20世紀初頭の進化思想がどのように社会主義思想とともに展開していったのかを詳しく説明してある。戦後のものとしては，W.F.ウェルトヘイムが『進化と革命』（1974）の中で，それぞれの語の定義を広範に扱っている。同書は「進化」と「革命」という語を使用して，現代的な課題を社会学的に考察することを目的としているが，同時にこれらの語が使用されるようになった歴史的背景の簡単な議論を行っており，発展用語の整理という点では本稿の目的に資する研究である。制度派研究で知られるG.ホジソンも『進化と経済学』（1993）において様々な進化思想を分類し，その歴史的経緯と分析的な意義を議論している。

包括的に「進化」主義的思想を扱っているのは以上であるが，それ以外に英国とドイツ，それぞれの国内における進化思想を扱っているものは数多い。例えば姫野（1995）の「世紀末イギリスの社会進化論の諸類型」などは20世紀初頭の英国の進化主義思想がどのような集団により支持されていたのかを知ることができる。また，江里口（2008）の『福祉国家の効率と制御：ウェッブ夫妻の経済思想』は，フェビアン協会のS.ウェッブとB.ウェッブが英国においてどのような進化思想を支持し，克服していったのかを詳細に論じている。フェビアンの社会主義思想の文献としては，R.ハリスン（2000）の『ウェッブ夫妻の生涯と時代』がある。

一方ドイツの社会主義に関する文献として，保住（1992）の『社会民主主義の源流』がある。同書ではベルンシュタインに端を発する修正主義論争を経て，革命主義から徐々に進化主義的な漸進的進歩主義へと移行していくドイツ社会民主党の詳細が描かれており，また社会民主党と社会ダーウィニズムとの関係も論じられている。また山本（1981）の『ドイツ社会民主党とカウツキー』も，第一次世界大戦終戦までのドイツの革命主義の展開が論じられている。

本稿では，まず次節にて進化主義思想成立の過程と革命思想との関係を論じ，第三節では20世紀転換期の英国とドイツの社会主義と進化思想の関係を論じる。第四節にて英国とドイツの社会主義に対するシュンペーターの評価を論じた後，第五節においてシュンペーターの評価を念頭に置いた「進化」と「革命」についての議論を行い，これを結論としたい。

２．進化思想の展開

2.1. 進化主義の起源

進化主義（Evolutionism）という思想自体は，1859年にダーウィンが『種の起源』を発表するさらに以前の啓蒙主義思想に由来している。拙著（小林 2015）にて論じているが，この思想は産業や科学技術の発展に基づいた「進歩に対する信仰」を伴っていたが，A.コントが三段階の発展段階を「実証主義的」な手法によって示したことにより，発展段階説という学問的枠組みを獲得して，体系的に発展してきた。この史観では，各民族や社会の発展度合いを比較することにより，一般的な「発展の順序」を確定することが出来ると考える。すなわち，すべての民族や社会は同じ発展経路を通じて進歩するという素朴な想定がなされた。この枠組みは，各社会の比較研究というかたちで人類学や社会学，歴史学，経済学などに広く共有され，科学的歴史研究におけるフレームワークの一つを形成した。ドイツ歴史学派のひとりE.ザーリンは，当時の進化思想の広がりについて，次のように説明している。

> 我々のいわゆる『発展』の道標として，サン・シモンやマルクス流の社会主義的図像や，概念の背後に控え，リスト，ヒルデブラント，シュモラーの歴史主義の背後に控え，コント並びにスペンサーの背後に控えていることが示される『進化主義』“Evolutionismus”こそは…この時期の全経済および社会学説の統一的目印である。（Salin 1929 訳 p. 152）

すなわち進化思想は社会科学研究において広く受け入れられてきた，一般的な思想であった。しかし引用にあるように，それは各論者の議論の「背後」に控えているものであり，論者が積極的にそれを支持・主張したというよりもむしろ，方法論的哲学として自然に受け入れられていたことを示す。

ザーリンは19世紀末から20世紀初頭にかけての大陸の進化主義思想を①「社会主義的・共産主義的な思想」に

由来するものと，②「英国のマンチェスター主義に批判的であった歴史主義者の進化主義」[1] に分けて議論する。本節ではザーリンのこの区分を保持しながら，現代の論者による研究も交えて，進化と革命の概念がこの時期どのように展開してきたかを議論する。

2.2. 進化主義と社会主義

ザーリンによると，社会主義者や共産主義者に支持された進化主義の源流の一つは，キリスト教の千年至福説における千年帝国の再来のような「信仰要素」や，トマス・モアに始まるユートピア思想家による社会批判など（Salin 1929 訳 p. 156–57）であり，最終的に「理想的な世界」に到達するという「目的性」を内在する。こうした見方によると「自然的」に歴史が展開した場合，時代を経るごとに人間の知性はより高い段階に至り，農工業生産力が向上することによって最終的には彼らが夢見るような社会が必然的に到来するとされる。

しかしユートピアンたちの楽天的な夢は，意識的な改革を目指す能動主義者たちが起こした「フランス革命」によって動揺する。この革命は，革命指導者たちが標榜する「自由」と「解放」，「平等主義」といった強い目的意識の上に生じており，それに参加した社会主義者たちは国家や貴族に武力で対立しようとした。彼等は社会発展を自然力には任せず，「意識的強力を行使しないでは事態の変化を期待することはできないという感情」（ibid. 訳 p. 159）を持っており，その態度は論理的な説得性をもって多くの社会主義者を動かした。ところが，こうした「意識的強力」は，参加者の多くが予想しえなかった強権的な政府を出現させるにいたる。

エドモンド・バークは「思慮と熟慮と先見の明をつかって 100 年かければやっと築けるようなものでも，怒りと逆上の力を使えば半時間で引き倒せる」（Burke 1790 訳 p. 359）と表現したが，‘国民議会’の参加者が合理的な理性と考えていたものは，理想的な国家を作る現実的な「計画」とはなりえず，彼らは独善的で近視眼的な「破壊」の力に頼らざるを得なかった。バークが正しく洞察していた通り，現状を合理的な主張の下で「理性的」に捻じ曲げようという試みは現実的な困難に直面し，主導者たちの計画はあっという間に潰えた。彼らは困難に立ち向かい，それを克服する能力を欠いていたのである。

しかしフランス革命は思わぬ副産物を生んだ。共産主義者 G. バブーフ[2] は革命の混乱に乗じ，政府転覆によって平等な社会を実現しようとしたが，その陰謀は事前に密告され彼は処刑された。このバブーフの平等主義／共産主義的思想は労働者の階級意識を喚起し，その後の長期にわたって強い影響を保ち続けることになる（Salin 1929 訳 p. 160）。以後 19 世紀を通じて階級闘争は激化[3]し続け，社会思想家は労働者階級の存在と，労働問題を意識せざるを得なくなった。サン・シモンを始めとする社会思想家は社会主義を発展の極限に置き，古典派経済学の継承者であった J. S. ミルもまた，労働者階級への共感に基づいた分配理論を模索している。[4]

K. マルクスは弁証法的な論法をもって，過去から現在までの社会的変動を「生産関係」の下に理解するという新たな社会進化の解釈を提示した。彼はダーウィンの進化論を高く評価[5] する一方で，その理論に自由競争を承認するようなブルジョワ経済的傾向が存在することも指摘する。個体間の競争による自然選択ではなく，階級という集団間の衝突を描くマルクスの社会進化的図式は，ダーウィンの進化論とは本質的に異なる（Hodgson 1993 訳 p. 114–115）。

マルクスの理論において「革命」という現象は，ヘーゲルから受け継がれた弁証法的な内的矛盾という摩擦の解決を促す社会経済進化の一過程であり，歴史的発展段階を進める力として定式化されている。この「発展段階」という図式は正しく啓蒙主義に由来する進化主義的な歴史研究の枠組みであり，原始共産制から封建制，資本主義といった各段階が法則的に進展することが想定されており，資本主義の後に（必然的に）生じるのが，より高度な社会形態としての共産主義ということになる。そして最後の段階に至るための原動力となるのが，工場労働者である「プロレタリアート」であった。

マルクスはリカード理論を受け継ぎ，その一部を強調することによって，資本が蓄積してゆくごとに利潤率が低下していく過程（利潤率低下傾向）や，社会的な不平等が累積してゆく過程（二大階級論）を定式化した。[6] 彼は古典派経済学の教義である経済の調和的均衡を否定し，歴史的事実を用いて格差拡大の傾向が存在していることを強調したうえで，それを理論化したのである。

しかしザーリンによると，重要なのはマルクスとその支持者が歴史的発展の過程を自然的過程としてではなく，人為的・意志的な過程としてとらえていたことである。そして，この傾向はフランスや英国よりも，ドイツやロシアで大いに影響を与えた。ザーリンはその理由について，ドイツのような「人格外的な，非ブルジョワ的な献身能力が強く存在していて，人間が自己及びその生活を一つの理念の最後の反映のためにただただ捧げるところでは，ますます強からざるを得なかった」（ibid. p. 174）としている。彼はまた，マルクス主義が最終的に「国家解消」，すなわち革命によって労働者主体の国家を形成するという点がドイツにつよい影響を与えた理由について，フランス革命以前のフランスと比して論じる。つまりフランス革命の以前に存在した「現状に対する不満，新たな形態，様相，および理念に向かっての不安な追求」

(ibid. p. 175) が 19 世紀中葉のドイツには存在しており，そしてザーリンは「盲目的な徹底的思弁，その執拗な，長い間信じられていたすべての価値が崩壊しても意に介さないその戦いぶり」(ibid., p. 176) について，マルクス主義がドイツ的である証拠とした。つまり，ザーリンはドイツ人の気質の中にマルクス主義への傾向を見出したのである。

2.3. 進化主義と歴史主義

ザーリンの言う「歴史主義者の進化主義」とは，複雑な世界を極端な抽象化によって説明する古典派経済学や，自由市場経済を推し進めることを主張するマンチェスター主義に反対するものである。19 世紀初頭のドイツ経済学の先駆者としては，英国の古典派経済学を承認し，ドイツの経済分析の主流であった「官房学」から新しい「国民経済学」への移行をリードした K. H. ラウと，そして発展段階説を用いて保護関税の重要性を主張した F. リストらがいる。リストは A. スミスに，極端に抽象化された「世界市民」的経済学を見出す一方で，英国の発展段階に後進国が到達するためには「保護関税」が必要であることを説いた（竹林 2020 p. 330)。歴史の発展段階を仮設し，古典派経済学に対抗したリストの方法について，ザーリンはその直観的理論における「将来への洞察」を絶賛している（Salin 1929 訳 p. 195）が，ともあれドイツ経済学も A. スミスを始めとする英国の古典派経済学への反応として出発したのである。

後にドイツ歴史学派の創立者といわれるロッシャー及び，ヒルデブラントとクニースといったドイツを代表する経済学者たちは，誰よりもリストの功績を認めた（竹林 2020 p. 330)。ロッシャーは国民経済学を「歴史的方法」の導入によって，すなわち「できるだけ多くの，できるだけ多様な国民の発展を比較」(ibid. p. 333) することによって改革しようと試み，これを「解剖学および生理学」と比していた。またクニースは経済法則の絶対性を否定し「国民性の影響」(Salin 1929 p. 210) を強調している。彼らは社会の多様性を認め，各国の異なる発展段階を比較するという啓蒙主義以来の進化的方法を基に，古典派を論駁しようとした。

19 世紀末に工業化による社会問題が顕在化してくると，G. シュモラーや A. ヴァーグナーといった社会政策学会の研究者たちが，社会問題をモノグラフ的な細密研究によって分析し，政策提言を行うようになった。彼らもロッシャーと同様に経済の時代差・地域差を重視し，歴史的研究に力を入れたことから，自らを「新歴史学派」[7] と名乗った。新歴史学派は実地調査と統計的分析に優れ，ドイツにありながらもマルクスのように資本主義を否定せず，特にシュモラーは「競争」と「協調」の二項対立を社会文化的発展の共通の基盤とみなした（Ebner 2003 p. 121)。彼らも理論的に遡って同定が可能な現象を対象として発展段階を想定し，それを政策の指針としようとしたが，それは研究の便宜上の手段であり，唯一の歴史的方法とは考えていなかった。現実的な提言を行うために極端な抽象化や一般化を嫌い，具体的・経験的な方法に重きをおいたからである。

マルクスを含め発展段階を応用した研究はどれも，コンドルセやコントの様に何らかの精神的・知的発達が定向的な発展段階を形成するという，古い啓蒙思想時代の進化主義に端を発している。すなわち一定の進化法則に従って，各社会や民族は同様の進歩を見せるという想定を共有しているのである。しかし，こうした古い進化思想は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて，人類学者や上記の歴史学派の研究者たちによる経験的研究の積み重ねと，そして方法論的な議論の深まりによって徐々に論駁されてゆく（小林 2015)。特に，シュンペーターによって最新（youngest）歴史学派の一人とされる M. ヴェーバーは，単線的な発展段階論によって自然法的な推論に導かれた一般化に対し，それが歴史の一回性や複雑性を無視していることを批判している（小林 2021 p. 16-17)。

そして同じころ，新たな「科学的方法」としてドイツ新歴史学派にも受け入れられてきたのが，スペンサーやダーウィンを嚆矢とする「自然選択」や「淘汰」，「漸進的・連続的適応」，「非定向性」，「突然変異」等の概念に基づいた，生物学的進化のアナロジーとしての新たな進化主義である。[8] 既に論じた通り，マルクスはダーウィンを高く評価してはいたが，そのブルジョワ的結論を嫌い，独自の進化理論を構成した。しかし 19 世紀末以降に進化理論の検証が進み，その論理的な妥当性が示されるにつれ，自然選択や突然変異といった含意が徐々に社会科学において援用されるようになる。

「自然選択」や「淘汰」というメカニズムによる漸進的な変化を中心に据えた社会分析は，保守層から社会主義者まで幅広い知識人に影響を与えた。例えばダーウィニズムは保守層が強く支持する拡張主義的な植民地主義政策に対し，文化的優位な国家が劣位と見なされる集団を統治することに正当性を与え，[9] 他方において社会主義者が支持する漸進的な社会化に疑似科学的な根拠をもたらした。こうした生物進化のアナロジーは 20 世紀初頭に特に強い影響を示すことになる，いわゆる「社会ダーウィニズム」へと発展する。社会ダーウィニズムの影響は保守と左派進歩主義の両派に広く浸透しており一様なものとは言えないが，生物進化という「科学的」な議論は，それを援用して自分の思想を補強する思想家に一種の説得力を与えたことは確かである。

保住（1992）によると，マルクス以後 19 世紀後半の多

くの社会主義者は，ヘーゲル史観の論駁としての唯物史観を支持していたのに対し，第二インターナショナル以降の 1890 年～1940 年代の社会主義者は「ダーウィン主義の影響のもとにマルクス主義を解釈するか，または社会ダーウィン主義からの社会主義批判と闘わざるをえなかった」（p. 195）。進化の解釈の違いはそのまま彼等の思想や政策的な方針に現れるため，それは論争の対立点を鋭く示すことになる。

3．英国の漸進的修正思考とドイツの革命主義

3.1. 英国の社会主義の動向

英国では，19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，H. スペンサーや B. キッドらといった自由主義的な進化主義思想が流行した（保住 1992 p. 199）。彼らは進化論の中でも「自然選択」や「淘汰」といった過程に着目し，人為的な介入なしに自然選択が生じた結果，能力的に劣位にあるグループに対し優位にあるグループ（階級や職業，時には民族）が優勢になることが自然的秩序であると説く。特に植民地獲得が重要な国策として扱われた時代，この思想は植民地の住人を統治することに対する科学的な「妥当性」を証明するものとして歓迎される。スペンサーは「進化」の啓蒙者として，その語を広めた張本人であり，ダーウィンも「進化」という語の使用においてスペンサーに倣った。しかし，スペンサーの進化主義はダーウィンのそれとは違い，ラマルクからの影響を受けたものであり，更にヴィクトリア朝的な保守的・自由主義的思想を強く反映したものであった。社会ダーウィニズムの根源にはスペンサー流の進化論の影響が見て取れるが，他方で様々な種類の進化論が混入しており，その多様性が広い解釈を可能にする原因となる。

スペンサーの進化思想には社会主義的な傾向を持つグループから，やはり進化論的な科学的論証に基づいた反論がなされることになる。さらに，優生学に伴う生物的進化の選択的な「操作可能性」は，社会ダーウィニズムに社会主義者を呼び込む強い誘因となった（Freeden 1979）。社会主義者が進化思想を取り入れた例として，フェビアン協会のウェッブ夫妻がいる。彼らはスペンサー的進化理論に論駁する形でダーウィンの進化を取り入れた。

19 世紀末英国の社会主義は混乱の下にあった。1881 年，H. M. ハインドマンは「広範な急進主義者の同盟」として社会民主連盟を結成したが，R. ハリスン（2005）によると，「すぐに，硬直的であると同時にユートピア的な，最も狭量なマルクス主義的党派主義に毒されてしまった」（p. 40）という。ウェッブ夫妻の様な知識人階級の社会改良主義者は，自己の立場に対して科学的論証による武装を行うために，進化論的な説明を科学的根拠として利用するようになった。彼等はハインドマンの様な革命的社会主義とは一線を画し，社会環境の変化に経験的に「適応」し，その都度，社会改良的な法整備を行うという漸進主義的な社会進化を目指した。S. ウェッブは 1898 年に公表した「1837 年と 1897 年の英国労働者階級」というドイツ語論文の中で英国の労働者階級の状況を精査し，マルクスが言うような極端な搾取の痕跡を確証出来ないことを示した（保住 1992 p. 96）。すなわち労働者階級の状況は改善されつつあり，労働者の革命的闘争の必然性は既に後退していたことを示す。多数の労働者が劣悪な生活条件の下で暮らしているという現実は，資本主義の矛盾の結果というよりもむしろ経済発展の結果であり，改革すべきは資本主義それ自体というよりも，むしろ資本家やブルジョワジーの「意識」である。そこでフェビアンはいわゆる「浸透作戦」という戦略によって，安価なパンフレットを売り，もしくは政治家や知識人を自宅に招いて夕食を囲んで議論を行うことによって，社会主義的な考えを浸透させようとした。浸透作成に影響を受けた者の中にはドイツ社会民主党の E. ベルンシュタインも含まれている。

ウェッブ夫妻の進化思想の基礎にあったのはスペンサーの進化概念であった。幼いころからスペンサーが家庭教師についていたという B. ウェッブ（ビアトリス．ウェッブ）は当初，スペンサーの進化論を信奉していたが，徐々にその競争賛美的な主張に反発し，新しい労働環境下における労働者の生産効率向上を目指す「機能的適応」の方を強調し始める。彼女によると社会主義改革者が重きをおくべきは後者の「適応」の問題，すなわち栄養不足や環境の不衛生などである（江里口 2008 p. 43）。こうした劣悪な環境に適応してしまった下層労働者には，明らかに進化的に「退行」した状態が見られた。それを未然に防ぐためには，労働者階級も産業進歩に適応し「消費水準の向上を含めた，生活様式の変化」（ibid. p. 45）が必要となる。しかし，こうした進化はスペンサーが考えるように「自然競争」によって達成されるのではなく「条件の整備」が必要となる。ここに国家介入の根拠が存在する。

夫の S. ウェッブ（シドニー．ウェッブ）も夫人のビアトリスと同様の視点を共有しており，スペンサーの予定調和的な一般化に対して「スペンサーは歴史的センスが無い」（ibid. p. 52）と批判した。進化の過程は本質的に場当たり的であり‘動態的’な現象なのであって，社会を制御するためには「思考習慣としての制度」を意識的に社会変化に適合させる必要がある。江里口によると，ここで「『民主主義』という『制度』進化のフィードバック装置が有効に機能しなければ，『革命』という破壊的な

変化がもたらされ」てしまう。そしてこの点こそが，「フェビアン主義者ウェッブの神髄であると同時に，彼等の『漸進主義』が，外在的な到達点としての『社会主義』を目指していなかったことを示している」（ibid. p. 54）と議論する。すなわち，スペンサーの様に自然淘汰を働かせれば自動的に理想的な進歩が達成される，という単純化されたプロセスではなく，果てしなく生じる社会の諸問題を一つ一つ解決しつつ漸進的に社会化を推し進め，そうした努力の積み重ねの行きつく先に社会主義が存在するかもしれないという，より現実主義的な見方である。[10]

革命か進化かという議論の萌芽は，このように 19 世紀後半から 20 世紀初頭の英国に既に見られえるが，英国において主流派であった穏健な社会主義者たちが「革命」に重きをおくことは無かった。それが政党の目的や，もしくは戦術上の対立として顕著になったのは 20 世紀初頭のドイツにおいてである。

3.2. ドイツ社会民主党における「進化」と「革命」論

1895 年のエンゲルス死去の後，マルクス主義者のベルンシュタインは「修正主義」を公に展開しはじめ，1899 年にはドイツ社会民主党の方法に根本的に異論を唱えた『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』（以下『諸前提』）を発表する。ベルンシュタインは忠実なマルクス主義者として青年期を迎えたがビスマルクの社会主義弾圧の下ロンドンへと亡命していた。そして，その亡命中にフェビアン主義的たちと交友を結び，徐々に彼らの穏健な進化思想に影響を受けた。[11] そして，マルクスの弁証法的な階級闘争史観ではなく「有機体的発展観」を提唱して「諸力の協調」による漸次的発展を目指し，民主主義的な法的手続きによって社会改良を重ねる「社会化」を主張するようになる。[12] 彼は啓蒙主義的な進化主義やユートピアンの千年王国のような空想には捉われてはおらず（保住 1992 p. 35），「社会主義的変革が，国家を自動的な扶養機構に変化しうるかのような思想は，まったく空想的なものとして拒否」されるべきであると考えていた。そうした思索の成果が 1899 年の『諸前提』に結実したのであるが，この論文に対し革命論者であった社会主義者，ローザ．ルクセンブルクは「社会改良か革命か」という論文の中で激しく糾弾したという（ibid. p. 64）。

当時，フェビアン協会の「穏健な社会化」に近い目的を共有していた最新ドイツ歴史学派は，①資本主義を認め②プロレタリアートを近代国家共同体の中に組み込み，そして③立法に基づいた社会改革を「有機的変化」としてとらえる，漸進主義的進歩主義の立場をとった（竹林 2020 p. 136）。最新歴史学派の一人，W. ゾンバルトは自己の著書の中で，ベルンシュタインの「進化」を擁護する（ibid. p. 144n）。[13] いわゆる「革命」のイデオロギーを減じた「社会改良」を支持する最新歴史学派の面々は，ベルンシュタインや社会民主主義政党の穏健派と接触を持ち，ベルンシュタインは新歴史学派の機関紙「社会科学と社会政策における雑誌（新アルヒーフ）」に論文を寄稿するようになった。

ドイツの社会民主党はその結成時，党の綱領として時の政権に譲歩した「ゴーダ綱領」を掲げていたが，この綱領に対し，マルクスはその日和見的な立場を批判した。その後マルクスの主張を基礎とした，いわゆる「エルフルト綱領」が「革命」を盛り込んだ党の綱領として採択される。しかしこの綱領の解釈をめぐり，修正論者のベルンシュタインとルクセンブルクの間で「党の戦略をめぐる論争」があった。党綱領の第一部は「経済的矛盾の増大と爆発」といった過激な内容を含んでおり，他方で第二部は「資本主義の民主主義化と社会化の増大と，そして国家の社会事業」を論じていた。階級闘争を強調するルクセンブルクは前者を支持し，社会立法を重視するベルンシュタインは後者を支持する形で，綱領から党の戦術を引き出そうとしていたという（保住 p. 100）。こうして「正統派マルクス」と「修正主義者」の間で，革命か進化かという主張の分裂が鮮明になっていったのである。

ベーベルやカウツキーといった正統派マルクス主義の重鎮はマルクスの階級闘争や資本主義崩壊説を支持し，労働者主体の合法的革命を期待した。またマッセンストライキを革命の一形態と見なし，労働者の自発的な意思表示の手段として推奨した。しかし彼等も議会戦略においては，国家を否定することが出来ず，「社会改良主義」的な者たちの主張を認めざるを得ない。こうして徐々に，階級闘争を原則とするカウツキーら社会民主党の中核と，現状の秩序内で改良を目指す帝国議員の党員との間の意見の矛盾が顕著になり始める。

山本（1981）によると，1909 年までのカウツキーは「資本主義の崩壊と社会主義運動勝利の不可避性，ブルジョワジーとプロレタリアートの非和解性」をいった特徴を持つエルフルト綱領の強固な保持者であり，左派革命主義者に近かったが，彼の立場はあくまでも原則論・一般論的であり，政策論に活かされることは無く「実践上の修正主義（改良至上主義者）は常に生き残る道を与えられ」た。しかし 1910 年，今度は「現実を無視した『革命主義先走り』をおさえる」（p. 204）ことに苦心したという。カウツキーの方針では「秩序」を持った社会運動に重点が置かれており，結果として「状況追認的な認識と，現状の SPD（社会民主党：筆者）の運動を正当化する意図が入り混じった非革命的なもの）（ibid., p. 205）になっていったという。いつ訪れるとも分からない資本主義の

崩壊を前にひたすら党の勢力を拡大すること自体が目的化し，結果として帝国議会の議席や党の構成員の増加，自由労働組合といった「合法的組織」の拡大が活動の中心となったのである。

こうした社会民主党上層部の変化の背景には，先進各国の「工業化」による生産量の増大がある。急速な工業化は，ドイツにおいても「進化」に対する関心を呼びおこした。すでに前節にて議論したが，マルクスはダーウィンに，「資本主義社会におけるブルジョワ的競争の闘いを反映するブルジョワ・イデオロギー」を見出す（保住 p. 201）。マルクスの歴史観は弁証法的唯物論に立脚したものであり，それ自体に対するダーウィンからの理論的な影響はほとんど見られない。一方，ベルンシュタインはマルクス的な弁証法的唯物史観にかわり，社会ダーウィニズム的な有機体進化の図式を取り入れ，資本主義内部の矛盾による崩壊という論理を退けて「資本主義のなかから漸次的に社会主義が成長してくる」と考えていた（保住 p. 207）。また彼はダーウィンの自然淘汰説に対して，社会集団にはいわば「群選択」というべきものが働くので，生存競争においては労働者の効率性を高める社会主義的集団が（自然競争を強調するような）他の集団に比べて優位であるという見方を支持していた（保住 p. 207）。こうした論理は，社会主義に立脚したダーウィニズムの擁護の一論法として，社会主義者や社会改良主義者に広く共有されていた。例えば既出のフェビアン協会員や最新ドイツ歴史学派の主張には，古い形態の手工業よりも新たな大規模工業への「適応」を重視する傾向がみられる。

カウツキーの進化観については，彼は「進化法則」という自然法則の社会への適応に否定的であった。むしろ社会形態は「歴史的条件に基づいて証明すべき」（保住 210）であり，マルクス主義こそが人類の発展法則を解明したと考えていたのである。

3.3. 計画経済の可能性と「進化」と「革命」のロジック

1914 年に勃発した世界大戦は，戦火を交えた各国の社会・経済を巻き込んだ，文字通りの総力戦となった。総力戦に備えるために，各国は自国の経済資源を迅速に戦争需要へと振り向け，計画的な生産を行うための戦時経済体制を整えた。しかし軍需物資の計画的・効率的生産が可能になったことで，社会主義計画経済の可能性が開かれたと考えるものも出現する。特に，フェビアン協会とドイツ社会民主党はどちらも戦時体制に備えた産業の「社会化」を推し進めるのに一役買った。英国においてはウェッブも参加した「石炭産業委員会（サンキー委員会）」（江里口 2008，p. 181）が，ドイツにおいてはシュンペーターも参加した「社会化委員会」（小林勝 2008）が組織され，資源の効率的利用を目的とした産業の国有化が議論された。[14] よって戦時経済体制の構築という理由はあるものの，計画的・社会的生産や，意思決定における労働者参加などの可能性がはじめて本格的に検討され始めたのである。

一方で，1917 年に始まったボルシェビズムによるロシア十月革命は，マルクスの想定とも異なる「革命」による独裁的な社会化であった。これは，徐々に暴力的革命から距離を置き始めていたドイツ社会民主党に強い衝撃を与え，カウツキーもこの流れを批判した。このころのカウツキーは「プロレタリアートが国民の多数派を形成し，この多数派が民主主義的に組織化されているところでは，内乱と独裁は必然的過程ではない」と考えており，民主主義的プロセスによるもの以外の「プロレタリア独裁」を認めなかった（山本 1981，p. 282–283）。結局ロシアの社会主義革命が他のヨーロッパ諸国に飛び火することはなかったが，「工業労働者による革命」という思想がソビエトのマルクス主義者により放棄されることもなかった（Wertheim 1974 訳 p. 194）。革命の火種は第二次世界大戦後，中国やキューバへと広がっていくことになる。

ここで，当時の「進化」と「革命」観を整理してみたい。ドイツ最新歴史学派のゾンバルトは改良主義的な文献と革命的文献についてについてまとめ，「改良文献は原理的に現存の資本主義社会を承認しつつ，この経済体制の上で変化と改善を求めるが，革命的文献は原理的に資本主義社会の土台を除去して社会を変え，作り直そうとする」という形で整理している（竹林 2020 p. 144n）。フェビアンやベルンシュタインは資本主義自体の存在価値と持続性を認め，この体制を所与として社会化を目指した。彼らは「漸進的進化」という進化論的な比喩を用いて，環境の変化に「適応」するように社会化を進める方法を支持した。

他方で初期のカウツキーやヒルファディングのようなドイツ社会民主党員は，マルクスの弁証法に端を発する「資本主義の内在的矛盾」を心から信じており，「革命」のような手段によってこれを打倒することが必要だと考えていた。しかし，彼らが基本的に想定していたのは既存の法的手続きに基づく「民主主義革命」であり，ロシア革命のような暴力的革命ではなかった。さらにロシア革命は資本主義の成熟段階に達していない体制の社会主義化であり，よってこの「社会主義」は，彼らの想定とは全く異なるものであった（山本 1981 p. 278–288）。彼らによるとプロレタリアートは民主主義国家の下で「より組織され，訓練される」（ibid. p. 282）のである。

フェビアンやベルンシュタインとカウツキーの論点の違いは結局，資本主義が内部の経済論理的な矛盾から崩

壊に至るとする前提を中心として生じているのであり，民主的に社会主義への移行を果たす，という合法的・平和的なプロセスへの志向は共有されていたように見える。仮に資本主義が崩壊に至るまでの間の漸進的改良や，議会における議席数の増加が継続的に生じて居れば，最終的に生じるのは革命的変化というよりもむしろ，国民の合意のもとに満を持して生じた漸進的変化であり，そもそも「漸進的・進化的」と「革命的」という語用上の対立は無意味なものになるはずである。しかし，1914 年の第一次大戦開戦時の党の分裂[15]や 1917 年のボルシェビズムによるロシア十月革命などは，暴力的革命を目指す社会主義が再び台頭するという悪い予感を呼び起こさせるものであり，さらに 1929 年の大恐慌は社会主義者の間で，「資本主義内部の矛盾」というマルクスの主張を裏付けるものとされた。社会主義的な思想がアメリカでも広がり，自由競争の制限を目的とする諸法令も施行された。これらの事情がシュンペーターの『資社民』執筆の動機の一部となっているのは間違いないであろう。

4．J. A. シュンペーターによる評価

本節ではまず，シュンペーターが『資社民』を執筆するまでに至った経緯を概観する。彼が上記で議論してきた「進化と革命」の対立をどのように受け取ったのかを理解するためには，まずシュンペーター自身の進化観を知る必要がある。

4.1. 英国とドイツの社会主義との接点

1901 年，ウィーン大学に入学したシュンペーターは 1905 年に開講されたオーストリア学派の経済学者，v. ベーム＝バヴェルクのゼミに参加した。当時マルクスの理論を批判していたベームのゼミには複数のマルクス主義者が参加し，自由市場主義者のベームに対して論戦を張っていた。シュンペーターはゼミにおいて，オーストリア学派とマルクス主義者の対立を目の当たりにすることになる。そこでは，後にマルクス正統派の理論的中核の一人となるヒルファディングやレーデラーなどがいた。

また彼の大学在学中，ドイツ最新歴史学派のヴェーバーやゾンバルトによりに刊行された「社会科学と社会政策における新雑誌（新アルヒーフ）」は，彼に強い影響を与えたものと考えられる。この中でヴェーバーらは，進化的・人種学的な議論を社会科学に取り入れることを強く主張している。

1906 年，彼は同大学のリゴローゼンに首尾よく合格し，欧州に遊学する。その途中でシュンペーターは一か月余りベルリンに滞在して歴史学派の面々と知己となり，さらに一年間ロンドンに滞在，ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（以下 LSE）の研究生となった。LSE はフェビアン協会を代表するメンバー，ウェッブ夫妻や G. ウォラスらが中心となって設立した社会科学系の大学であったが，S. ウェッブの方針により，基本的に教員の思想については中立的であった。シュンペーターは LSE では，フェビアン協会の S. ウェッブによる講義「社会調査の諸方法」を受講している。同講義がどれ程シュンペーターに影響を与えたのかは，未だ研究の蓄積が少ないところではある[16]が，彼は後年，その講義の印象について，ドイツ社会政策学会の議論と似た性質のものであったことを回顧している（Schumpeter 1954 p. 157）。

しかし少なくとも LSE 遊学以降，シュンペーターはその生涯を通じてフェビアン協会に関心を持ち続けた様であり，折につけ彼等の著作や政策に言及している。[17]特に『資社民』（Schumpeter 1941）では，ドイツ社会民主党との比較においてフェビアンの社会化政策を評価し，成功した社会主義団体として称賛している。このように，ウィーンでマルクス主義者と，そしてドイツと英国で社会改良主義者との接触を持った彼が「進化」と「革命」をどのように解釈し，定式化していたかを考えてみたい。

4.2. 『経済発展論』に見る「進化」と「革命」

オーストリア学派に学び，ドイツ歴史学派に影響を受けたシュンペーターは，かれの主著である『経済発展の理論』（Schumpeter 1912）を執筆する際，①動態的な経済発展の理論化と，そして②マルクスによる資本主義終焉論の論駁，という二つの目的を想定していたように思われる。この著書の重要な特徴は，資本主義における経済発展が線形ではなく「革命的・断続的」に生じ，それが景気循環の波を形成するという図式であった。「単線的発展」，すなわち啓蒙主義に由来する進化主義の論駁という図式は当時の流れであり，M. ヴェーバーの「客観性」論文や，LSE の社会人類学者 E. ウェスターマークの見解に影響を受けているように思われる（小林 2020, p. 16–17）。ヴェーバーは，歴史過程をみてみると自然法的に線形な発展といった現象は現実には見られず，「理念型」としての発展傾向が存在するだけであると考え，古い進化主義論者が具体的研究を行ったとしても，行き過ぎた一般化への一種の「堕罪」として行われるのみであることを非難している。

シュンペーターに立ち返ってみると，彼は啓蒙主義的な進化主義思想のみならず生物進化的な類推そのものを否定してはいるが，その経済発展の図式は「進化的」な

ものである。『経済発展の理論』によると，実際の社会経済の歴史を観察した際に，戦争などの結果としての多くの「非連続性」が発見される（Schumpeter 1926，訳 p. 179）。経済学者として経済の体系内部から生じる非連続性を説明するため，シュンペーターは「企業者」という特殊な主体を設定した。この企業者は市場に新規性をもたらして既存の価値体系を破壊するという意味で，経済的領域における「革命」を生じる主体である。経済的な革命は大きなものから小さなものまで存在し，常に市場の攪乱要素となり続ける。1920 年代までのシュンペーターの議論では，企業者による個々の革新は経済発展の波を形成して市場における既存の大企業による秩序を転覆し，企業者は自己の革命を達成する。経済発展による継続的な利潤の持続は，資本の有機的構成の高度化による，長期にわたる「利潤率の低下傾向」を論駁するものである。

さらに，企業者は「経済の非連続性を説明」するだけではなく「社会階級の流動性」を説明する主体としても重要な役割を担う。企業者のこの役割により，シュンペーターはマルクスの示す資本主義の矛盾の別の側面，「二大階級への分裂」という議論を論駁する（Schumpeter 1927）。彼によると，企業者は資本家や労働者といった古典的経済学で想定されているような固定された階級ではなく，また特定の階級から出現するものでもない。資本家階級であれ労働者階級であれ，企業者の資質のあるものは銀行による信用創造を通じて革新を達成し，財を得て能動的に階級を移動することが出来る。企業者による革新が既存の体系を破壊し，企業の所有者や経営陣を退場させて新たにブルジョワ階級を形成するのであれば，マルクスのいうような特定の主体への資本の集中は生じない。また経済発展の結果，財生産の増加により労働者階級の実質賃金は上昇をし続け，窮乏化する事もない。よって極端な富を持つ少数の資本家と窮乏化した大多数の労働者という「二大階級への分裂」が生じることもない。富の集中への社会的不満の鬱積は革新による新機軸により取り払われ，労働者による社会主義革命は不要となる。このように，資本主義は不安定性を内在しつつも持続性のあるシステムであり，階級闘争によっては容易に消滅するような体制ではない。ここにマルクス主義における「革命」観に対するシュンペーターの経済学的・社会学的な論駁が完成するのである。

このように，彼の社会進化の図式はマルクス的な階級闘争を論駁する形で展開されたと考えられる。企業者という「変異」が引き起こす新機軸と，旧経営の淘汰，新機軸に対する他の経済主体の「適応」，経済発展の影響による社会経済的環境の変化などの図式は，文字通りダーウィン的な進化であり，シュンペーターも 1920 年代以降はこれを認めている。この頃のシュンペーターは体系内部から生じる力による社会発展を「進化」と類推しており，この語の使用方法は，G. タルドや W. ジェイムズ，そして A ベルクソン等，20 世紀初頭のダーウィニズムに影響を受けた進化主義者の方法に近いように思われる。

4.3. 『資本主義・社会主義・民主主義』に見る「進化」と「革命」

このように，シュンペーター体系における「革命」的要素とは，①イノベーションによる市場経済の刷新と旧経営の解体，②社会階級における企業者の上昇と旧企業の地位下落といった現象を引き起こす，経済社会的進化の一局面に過ぎない。よって，ドイツ社会民主党内における「進化か革命か」といった標語に代表されるような意見の分裂が当初，シュンペーターに対し，あまり強い印象を与えなかった事は確かであろう。1918 年，彼はドイツ社会化委員会に参加し，さらにオーストリア初の社会主義内閣，カール・レンナー内閣に蔵相として入閣した。政治的能力の欠如から一年ももたずに失脚したが，その後の 1920 年に「今日における社会主義の可能性」と題する論文を執筆し，その中でシュンペーターは次のように議論している。

> 完全に純粋な形で，意識して系統的（法的）に完成された社会の組織形態として社会主義が実現されうるのは，ただそれを志向する政治的，立法的，行政的行為，すなわち「社会化」によってのみである。あらゆる事物が社会主義に対して準備されているような「満期の場合」でさえ，なお社会主義への誘導，つまり社会化が必要であり，それなくして競争経済が「おのずから」消滅することはないであろう。そのことはマルクスも知っていた。その点に，社会主義を実現する世界革命についての彼の見解の価値が存在する――革命はむろん社会主義への進化を排除するものではなくて，あれほどポピュラーで，あれほど浅薄な革命と進化の対立にもかかわらず，まさにそれを前提とするのである。ただ，われわれがマルクスと見解を異にするのは，かれがあの種の進化やまたそれを完成する革命の推進力をたえず激化していき，ついには爆発させざるを得ない階級対立の中に認めたとしている点にある。（Schumpeter 1920 訳書 p. 122）

シュンペーターによると，マルクスは社会主義が啓蒙主義者の信じるような「自動的・自然的」な過程によって達成されるのではなく，何らかの意思による誘導が必

要であると考えているが，シュンペーターはそれこそが「社会化」への漸進的進化であることを説く。そして彼は，マルクスが漸進的進化の末にでは無く，暴力的革命を導くような階級間の闘争に革命の契機を見出していることを問題視している。ここでは，マルクスの理論における「進化」と「革命」とは，いわゆる唯物史観と急進主義的な暴力性とによって分離されてしまっているのである。

前節で議論した通り，同論文の執筆と前後して，世界は戦時経済体制やロシア革命の勃発などにより徐々に左傾化してゆく。シュンペーターも大企業のチームワークによる研究開発や，合理的な計画の有用性を認めざるを得なくなり，企業者を主体とする発展観は勢いを潜めた。[18] そして 1929 年，マンハッタン発の世界大恐慌が始まり，世界経済は長い停滞と政府介入の時代へと突入する。世界恐慌の衝撃も冷めやらぬ 1932 年にシュンペーターはドイツのボン大学からアメリカのハーバード大学へと移ることになった。彼は若手研究者の教育に力を注いだが，同時に彼独自のプロジェクトである「経済学と統計学と歴史」を統合する試みに没頭し，1939 年には『景気循環論』を発表した。

彼はハーバードにおいてマルクスを教えることのできる数少ない研究者の一人であった。彼のアメリカでのマルクス研究がどのようなものであったのかは本論文の範疇を超える問題であるが，『資社民』の執筆に至る頃にはシュンペーターはマルクスの議論自体に，以前のような強い意味における「革命」への志向を見出さなくなったようである。例えば『資社民』の第四章「教師マルクス」において，シュンペーターはマルクスの理論からボルシェビズムのような過激な「革命」思想を切り離そうとしているように見える。彼は第四章の結論部において，マルクスの「弟子たちを対立させた問題，すなわち進化か革命かの問題」に解決を与えるために，以下のように議論している。

> マルクスにとって進化こそが社会主義の生みの親であった。彼は社会的事物の内的論理の意義をきわめて強く心にしみこませていた人であったから，革命が進化の仕事の何らかの部分にとって代わりうるなどとは信じなかった。革命はそれにもかかわらず生まれる。しかしそれは，単に諸前提の完全な組み合わせのもとで，結論を導くために生まれるにすぎない。したがってマルクスのいう革命は，その本質と機能において，ブルジョワ急進主義者や社会主義陰謀家のいう革命とはまったく趣を異にするものである。それは本質的に満期における革命である。（Schumpeter 1950 和訳 p. 93）

こうして彼はマルクスの革命を，急進主義者や陰謀家の手による「革命」から遠ざける。『資社民』を執筆するために作成した草稿において[19] 彼はマルクスの「歴史の経済的解釈」を分析しているが，こちらの草稿にはシュンペーターの真意がよく表れている。カウツキーも議論していたが，マルクスの言う「革命」とは「資本主義が成熟しきった環境下において（すなわち満期において）」という条件が付くものである。これが満たされない場合，社会の制度的枠組みは「その経済的基礎を永続させるような『それ自身の慣性』（a momentum of its own）を持」（補遺稿 p. 52）つ。シュンペーターによると，ここにマルクスが革命を持ち出した理由がある。

> 彼（マルクス）が革命によって排除しようとしたものが，このモメンタムであったことは確かである。暴力によって新しい世界を創出することを望む革命主義者に共通した態度のいかなるものも彼に課すことはできなかったが，とはいえ，彼の交友関係と彼の情熱は特殊なケースであるが彼をして似た態度をとるよう変質させた。彼の革命は社会主義へ向かっての進化と両立できなくはないだけでなく，その実現であった。それは時の充分性の下での革命であった。（補遺稿 p. 52）

このように，シュンペーターはマルクスに同情的な論調で，彼の議論の真意を説く。シュンペーターによると，マルクスにとっての「革命」は理論的な経済の進化プロセスの延長上に生じる別個のプロセスというよりは，進化そのものの一部分であり，時の充分性という条件を前提としたものであった。しかし，英国の急進的社会主義者やドイツ社会民主党，ロシアのボルシェビキなどが示した「革命」概念は，暴力的革命やテロリズムによって国家の転覆を図るという，政党の過激な戦略であった。ロシア十月革命などといった疑似的な「社会主義革命」の発生により，戦略の一環としての「革命」の意義はますます政治色を強めた。シュンペーターはカウツキーと同様に，未成熟な発展段階にあるロシアにおいて（すなわち未だ満期に至っていない状態のロシアにおいて），社会主義革命が生じたことを非マルクス的として批判する（Schumpeter 1950 p. 528）。しかし，シュンペーターがマルクスを「革命思想」から救いたかった理由は，もっと別なところにあるかもしれない。

4.4. 社会主義に至る「進化」

『経済発展の理論』においてマルクスの利潤率低下傾向と二大階級論の論駁を試みたシュンペーターであったが，それは経済理論としての批判であり，彼は分析にイ

デオロギーを持ち込んではいない。[20] ドイツ社会化委員会やカール・レンナー内閣への入閣，社会主義者のエミール・レーデラーとの長きにわたる親交といった事実から，彼が社会主義に傾いていたという議論も多い。しかし他方で，サミュエルソンはシュンペーターが「19 世紀型の旧い資本主義」に強い共感をしていたとみている。少なくとも彼はフェビアンやドイツ歴史学派，そしてオーストロ・マルクス等との議論を深めていたのであり，シュンペーターがどちらにより共感していたかは本論文の範囲を超えるため，ここで詳細に論じることはしない[21] が，少なくとも彼は，経済分析においてはイデオロギーの中立性を重視していたように見える。

例えば，ドイツではワイマール共和国が，英国では労働党政権が誕生してフェビアン協会の S. ウェッブも入閣を果たしたように，漸進的進化を支持する社会主義者は着実に地盤を固めつつあったが，こうした社会主義者たちもまた『資社民』において，シュンペーターの客観的分析の一部となる。彼等は中産階級出身というブルジョワの申し子であるのだが，シュンペーターの分析によると，資本主義自身が「社会不安の中に特定の利害関係をつくり出し，これを教育し，助成する」（Schumpeter 1950 p. 228）ことにより，資本主義に敵意を持つこうした知識人層を作り上げる。資本主義は知識人を効果的に支配する意思を持っていないのである。

また大恐慌の後には知識人のみならず政界人や財界人さえも反資本主義的傾向を示した。[22] 特にルーズヴェルトのニューディール政策はその性質上，企業の自由を奪う，反自由主義的・反資本主義的な色彩を帯びていた。著作では価値評価を示さないシュンペーターであったが，私的にはあからさまにルーズヴェルトに反感を示し，嫌悪していたという。しかし，シュンペーターが嫌悪していたのは，彼の“反資本主義的”な態度では無かった様である。マクロウ（2010）によるとシュンペーターは，経済危機の下にある有権者が判断力を失い「共産主義者，ファシスト，過激派社会主義者など，あらゆる党の扇動家が口にする不可能な約束」（McCraw 訳 p. 232）を信じてしまうことを恐れていた。[23] シュンペーターは「個人的に多数の民主的な政府の崩壊を目にしてきたヨーロッパ人の観点から，このニューディール政策を観察していた」（ibid. 訳 p. 375）のである。

すなわち，シュンペーターが特に脅威を感じていたのは，特定の権力者に権力が集中することであった。彼は巧妙でカリスマ的なローズヴェルトについて「権力が独裁者に集中する」（ibid., p. 381）ことを極端に恐れており，またレーニンが，労働者の「解放」について，それが労働者自身ではなく「暴徒を指揮する一団の知識人の仕事たるべき」（Schumpeter 1950, p. 528）と考えていたことを「反マルクス的」と糾弾する。

マルクスは確かに，政治権力の奪取が社会化の前提であることを認めていたが，それには「事物と精神が成熟したとき」（ibid. p. 584）という条件が付く。英国では，第一次世界大戦後に大衆の間において革命的な機運が高まり，政治ストライキが生じた。英国の労働党は，この状況から抜け出し「漸次自らの地位を改善し，ついに一九二四年には（労働党の）マクドナルドが政権をとるにいたった」のであり，左派政党として「国事を担当しうる能力を持つこと」（ibid. p. 588–589）を十分に立証した。シュンペーターはこうした，民主的な手続きという前提の下での社会化について，それが「社会主義の目的達成に役立つ」と評価する。彼は民主主義に全幅の信頼をおいているわけではないが（ibid. 第四部），どの様な経済体制下にせよ，その手続きに対して一定の信頼性を持っていたことが伺われる。

独裁ではなく，ある程度の「合意」を重視するシュンペーターは，知識人の手による社会化のプロセスに着目する。例えば彼はフェビアン協会を例に挙げ，彼らが階級闘争や革命というスローガンに嫌悪を示しており，民主主義の下における国家社会主義を目指して階級闘争を避け，「彼らの原理を平和的に，しかも効果的に浸透」（ibid. p. 518）させることを選んだことを評価した。そして，フェビアンたちが「ある意味では，マルクス自身よりもよりよきマルクス主義者であった」（ibid. p. 519）と主張する。実戦的に社会進化と向き合い，暴力では無く民主的な手段を用い，究極的な目的に向かって果敢に行動するフェビアンの特徴を，シュンペーターはマルクスの理想と同一視したのである。

マルクスは資本主義の矛盾が「革命」の契機になりうると説くが，シュンペーターによると，マルクスはその矛盾が極限まで行きついた結果，苛烈な競争から資本家自体をも救済することにより「途方もない文化的諸力（新しい文化的創造の源泉）」も同時に開放するとしている（補遺稿 p. 51）。マルクスは確かに『資本論』の第三部において「窮迫と外的な目的への適合性とによって規定される労働が存在しなく」なる，「自由の王国」について述べているが，[24] この「（自由の：筆者）王国の彼岸において，それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が，真の自由の王国が――といっても，それはただ，自己の基礎としての右の必然性の王国の上にのみ開花しうるのであるが――始まる。労働日の短縮が根本条件である」（Marx 1967 訳書 1435）と述べる。労働への制約が取り払われるほど発展した「自由の王国」においては，生産力の増進により，労働者も資本家も資本主義的競争から解放され，本来の人間の目的である文化的な諸力が解放される。シュンペーターによると，これは労働者の搾取

からの解放であるのと同時に，苛烈な競争からの資本家の解放でもあるので，資本家もこの変化を進んで受け入れるであろう。そして，こうした将来像は資本家の心象における社会主義への抵抗を取り除き，社会主義へのスムーズで民主的な移行を可能にする。

フェビアンや英国労働党の活躍はいわば，資本主義が「時の充分性」に向かっている証左のようにも見える。シュンペーターによると「社会の合理化が極めて徹底したところまで行き尽くされ，そして利子率がゼロに向かって収斂していると見込まれることが出来る場合，人々の心理的状態が，その上に封建的並びにブルジョワ的先入観を失ってしまいかつ心理的に大きな変化を肯定する準備ができていると見込まれる場合，そうした場合に時の充分性の下での社会主義は『全く理にかなったもの』」（補遺稿 p. 52）となる。もしも資本主義が社会化を推し進め，その過程の延長線上に社会主義への移行があるとすれば，それは資本主義システムの自然な社会主義への交代であって，特定の個人や集団の近視眼的な合理性により実行される，「矛盾した資本主義体制」の転覆ではない。シュンペーターの解釈する「進化」は体制内部に要因を持つ，社会を促進させる力であり，革新のような穏健な革命をも含む。よって，彼にとってドイツ社会民主党が見せたような「進化」と「革命」の対立は，その定義上において無意味なものとなる。

５．結論

本論では，「進化と革命」という議論が，どのように英国とドイツで展開され，また特にドイツにおいて鋭い対立を生じるに至ったのかを説明し，またそれがシュンペーターの『資社民』の議論にどのように影響を与えたかを論じた。英国とドイツの「進化主義思想」には並行性と異質性が同時に存在している。英国では，19 世紀末のスペンサーやベンジャミン・キッド等に影響を受けた，啓蒙主義以来の「定向的・目的論的」な進化主義が盛んである他方で，シドニー・ウェッブなどの社会主義者を含む幅広い主義主張を持った者が，進化思想を支持していた。

こうした事情はドイツでも同様であり，ビスマルクを支持する保守的思想家から社会改良主義者，そしてマルクス主義者まで広く進化論的アナロジーを好んでいた。しかし，ベルンシュタインが帰国して社会主義における進化主義的思想を持ち帰って以来，ドイツの社会主義政党を代表するドイツ社会民主党員たちは「進化」か「革命」かという，互いに背反すると考えられた強い命題同士の対立を増幅させていったように見える。

シュンペーターはというと，革命という要素を自己の理論に組み込み，企業者をその担い手とすることで，①利潤低下傾向を否定し企業者利潤の持続性を主張し，そして②二大階級論を否定して企業者の階級的流動性を強調することで，資本主義が矛盾の噴出により自壊するというマルクスの議論を乗り越えた。「革命」は，既存の大企業という既得権益を革新の力をもって打ち倒す「企業者」が担っており，社会経済進化の一過程という事になる。しかし企業者といえども，その成果は市場において審議され，市場が民主的に受け容れたものだけが革新として成功する。彼は暴力的な手段としての「革命」を忌み嫌っていたのである。

『資社民』においては，彼は資本主義進化の最終的な過程として資本主義が自壊することを示そうとした。これは階級闘争の様な矛盾によるというよりも，資本主義に内在する構造的進化，すなわち社会化の結果，知識人や大衆がそれを受け入れる準備を整えたのちに生じるのであり，最終的な体制の転換は民主的に行われ，もはや暴力的な革命は存在しない。シュンペーターによると，このプロセスこそがマルクスの主張したかった過程であり，これは「よりよきマルクス主義者」としてのフェビアン協会などの社会主義政党によって担われる。

シュンペーターが特に恐れたのは特定の個人やグループによる独裁であり，『資社民』においても資本主義や社会主義といった経済体制に対するイデオロギー的な価値判断は行われていないように思われる。シュンペーターは多数の合意が正しい結果を導くことに疑念を感じていたとはいえ，民主主義に一定の価値をおいていたのであり，‘放蕩の限りを尽くした資本主義’の下における民衆の精神の「合理化」という論法をもって平和裏に社会主義に移行することを予想した。資本主義の下で精神的に成熟した大衆は，暴力的にそれを転覆させるのではなく，民主的なプロセスによって資本主義を丁重に埋葬するのである。

参考文献

Burke, E. (1790) *Reflections on the Revolution in France,* 二木麻里訳 2020『フランス革命についての省察』光文社古典新訳文庫.

Erbner, A. (2000) “Schumpeter and the ‘Schumollerprogramm’: integrating theory and history in the analysis of economic development”, Evolutionary Economics 10, 355-372.

——. (2003) “The Institutional Analysis of Entrepreneurship: Historist Aspects of Schumpeter’s Development Theory”, in Joseph Alois Schumpeter: *Entrepreneurship, Style and*

Vision. Ed by Backhouse, J. Kluwer Academic Publishers, 117-139.

Freeden, M. (1979) "Eugenics and Progressive Thought: A study in Ideological Affinity" The Historical Journal, Vol. 22, No. 3, 645-671.

Harrison, R. (2000) *The Life and Times of Sidney and Beatrice Webb: 1858-1905*, Macmillian Press Limited. 大前眞訳 2005『ウェッブ夫妻の生涯と時代』ミネルヴァ書房.

Heilbroner, R. L. (1953) *The Worldly Philosophers*, 八木甫，松原隆一郎，浮田聡，奥井智之，堀岡治男訳 2001『入門経済思想史：世俗の思想家たち』筑摩書房.

Hodgson, G. M. (1993) *Economics and Evolution. Bringing Life Back jnto Economics,* Blackwell Publishers, 西部忠　監訳 2003『進化と経済学』東洋経済.

Marx, K. (1894) [1973] *Das Kapital*, Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 25. 社会科学研究所監修，資本論翻訳委員会訳 1989『資本論』第 III 部第 13 分冊，新日本出版社.

März, E. (1983) *Joseph Alois Schumpeter: Forscher, Lehrer und Politiker*. München: Oldenbourg. 杉山忠平監訳，中山智香子訳 1998『シュンペーターのウィーン：人と学問』日本経済評論社.

McCraw, T. K. (2007) *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 八木紀一郎監訳，田村勝省訳 2010『シュンペーター伝：革新による経済発展の預言者の生涯』一灯舎.

Salin, E. (1929) *Geschichte der Vblkswirtschaehre,* Berlin, ss. II, 106. 高島善哉訳 1935『ザーリン国民経済掌史』三省堂.

Schumpeter, J. A. (1908) *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. Leipzig: Dunker & Humblot. Translated into English by Bruce A, McDaniel. *The Nature and Essence of Economic Theory*. Transaction Publisher. 大野忠男，木村健康，安井琢磨訳 1984『理論経済学の本質と主要内容』上・下巻　岩波文庫.

——. (1912), *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. Leipzig: Duncker & Humblot. 八木紀一郎監訳，荒木詳二訳 2020『シュンペーター　経済発展の理論（初版）』日本経済新聞出版.

——. (1920), "Sozialistische Möglichkeit von heute" Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd 48, 305-360. 大野忠男訳 1977「今日における社会主義の可能性」『今日における社会主義の可能性』創文社.

——. (1926). *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung: Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, Munich and Leipzig: Duncker & Humblot. 塩野谷祐一，中山伊一郎，東畑清一訳 1977『経済発展の理論』上・下巻　岩波文庫.

——. (1927) [1991]. Die sozialen Klassen im ethnisch homogen Milieu. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*. 都留重人訳 1956『帝国主義と社会階級』岩波書店.

——. (1950). *Capitalism, Socialism and Democracy Third Edition*. 中山一郎，東畑精一 1995『資本主義・社会主義・民主主義』，東洋経済新報社.

——. (1954). *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. s Inc. 福岡正夫，東畑精一訳 2006『経済分析の歴史』上／中／下巻，岩波書店.

Wertheim, F. W. (1977) *Evolution and Revolution: The Rising Waves of Emancipation*. Uitgeverijen boekhandel Van Gennep B. V., Nes 128, Amsterdam, The Netherlands. 清水元，川勝平太訳 1982『進化と革命』紀伊國屋書店.

江里口拓（2008）『福祉国家の高率と制御―ウェッブ夫妻の経済思想』昭和堂.

小林大州介（2015）『単線的発展論の超克としての初期イノベーション理論』経済社会学会年報　37, 203-212, 経済社会学会.

小林大州介（2021）『LSE 社会学と J. A. シュンペーターの経済発展論』経済学史研究，第 62 巻 2 号，1-25.

小林勝（2008）『ドイツ社会民主党の社会化論』お茶の水書房.

大野忠男編（1977）『今日における社会主義の可能性』創文社.

竹林史郎（2022）『歴史学派とドイツ社会学の期限』ミネルヴァ書房.

筒井正夫（2019）「社会主義・共産主義的世界観の特質と問題点」彦根論叢 No.421，4-21.

姫野順一（1995）「世紀末イギリスにおける『社会進化』論の諸類型(1)市場・効率・環境への視座」長崎大学教養部創立 30 周年記念論文集，127-145.

保住敏彦（1992）『社会民主主義の源流』世界書院.

百木漠（2016）「マルクスの未来社会論を再考する」経済社会学会，38 巻，161-170.

山本左門（1981）『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会.

史料

『補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」』浦城晋一編 2015.

文末注

1　歴史主義者には，いわゆるロマン主義者や F. リストなどに加えて，ワーグナーが歴史学派と呼んだ，シュモラーや K. ビューヒャー，そしてシュンペーターが最新（youngest）歴史学派と名付けたヴェーバーやゾンバルトなども含まれる。

2　現代的な意味で「共産主義」という語を使用したのは，このバブーフが最初であったとされる。

3　特に 1848 年に生じた各国の暴動的革命や 1871 年のパリ・コミューンの自治宣言など，武力闘争に至る騒乱が続いた。

4　J. S. ミルが分配論の恣意性を指摘し，労働者に同情を示して共産主義的な図式に利点を見出した理由としては，妻のハリエットからの影響も挙げられるであろう。詳しくは R. L. ハイルブローナーの『入門経済思想史』第 5 章を参照の事（Heilbroner 1953）。

5　ホジソン（1993）によると，マルクスはダーウィンの理論を「歴史における階級闘争の自然科学的な基礎」と称賛し，エンゲルスとともに「ダーウィンのひそかな唯物論や，創造説に対する反駁や，彼が暗黙のうちに神を廃位させたことに引き付けられた」（p. 113）としている。

6　リカードは当初，機械の使用が労働者の仕事をすべて代替することは無いという，スミスの議論を受け継いでいたが，徐々に機械の導入によって失業が増加する可能性を議論するようになった。

7　竹林（2020 p. 27）によると，シュモラーがメンガーと「理論的方法」の在り方で争っていた頃，A ヴァーグナーがこれを「オーストリアの理論学派」と「ドイツの新歴史学派」の対立として表現したという。これが「歴史学派」という呼称の発端となった。

8　姫野（1995）によると，スペンサーの「同質的なものから異質的なものへ」という社会進化論は，ウェッブだけではなく，マーシャルの経済学，J. A, ホブソンの社会主義，マロックの貴族擁護論や B キッドによる帝国の「社会効率性」の擁護論等，保守と進歩主義の区別を超え，様々な方面に影響を与えた。

9　しかし，リベラルな急進派と見なされる集団もしばしば帝国主義的拡張主義に同調した。例えばフェビアンは，植民地戦争の一つであるボーア戦争を政治的配慮から支持している。

10　シュンペーターはマルクスの理論にも同様の視点を見出し，『資社民』執筆のためのメモにおいて「マルクスはつまるところ，歴史的センスを欠いてはいなかった」（補遺稿 p. 51）と結論付けている。

11　この点の妥当性については，本稿の範疇を越えているのでここで詳細に論じることはしない。詳しくは保住（1992）の議論を参照せよ。

12　一方でドイツでは，権力の側からの「国家社会主義」的傾向が見られた。ビスマルクはいわゆる「飴と鞭」政策によって社会主義者を弾圧する他方で，国家からの福祉政策の提案も行っている。

13　しかし，竹林（2020）はゾンバルトが改良（進化）よりも革命的文献に，自分の立場をもとめたとする。）

14　江里口（2008）によると，ウェッブは独占的生産による①競争から生じる浪費の節約，②生産技術・経営組織の改善による生産費の削減などを「産業組織改革への一歩」として評価している（p. 183-184）。独占が弊害をもたらす部門では国有化も視野に入れていたということで，ウェッブがこうした産業集中を，社会主義への一歩とみなしていたのは間違いない。

15　ドイツ社会民主党は戦争参戦の質（侵略戦争か防衛戦争か）を巡って党員の間で主戦派と反戦派に分裂した。特に主戦論に立ち，党内の多数派であった社会民主党の議員団は，戦時公債発行の議決に賛成することにより戦争を暗に承認してしまい，ドイツ社会民主党は世界の社会主義者から批判にさらされる詳細については山本（1981）を参照のこと。

16　ウェッブ講義がシュンペーターにどの様な影響を与えたかについては，拙著小林（2021）にて，ある程度論じてあるので，これを参照されたい。

17　例えば，1919 年にカール・レンナー内閣に大蔵省として入閣したとき，シュンペーターは官僚を前にして，フェビアン流の「一度きりの財産税」の重要性を説いたという（März 1983 訳 198）。

18　1919 年の『帝国主義論』において，シュンペーターは独占均衡の安定性を認めてはおらず，独占企業化においても資本主義が安定的に発展するとしたヒルファーディングを批判している。しかし，少なくとも 1928 年に書かれた『企業者』においては，独占企業の生産効率を認め，更に 1929 年の『資本主義の不安定性』においては，より積極的にその効果を認めている。そして補遺稿では，ヒルファーディングが上記の理由で資本主義崩壊論を転換したことを称賛しさえしている。

19　この草稿はハーバード大学のシュンペーター文庫に所蔵されていたものを，三重大学名誉教授の浦城晋一紙が日本語訳しており，本稿では氏の集められた資料と和訳を使用している。この和訳版はネットに

て入手可能である。

20　シュンペーターは最初の著書『理論経済学の本質と主要内容』（Schumpeter 1908）において，政治的イデオロギーと経済分析を明確に分離している。

21　筆者は，彼の思想の根底には社会主義者へのシンパシーがあったことは間違いないが，それでもやはり，平和主義的な資本主義経済の方を好んだと考える。『帝国主義論』や『資社民』の第 11 章において，シュンペーターは資本主義経済（産業ブルジョワジーや商業ブルジョワジー）が根本的に「平和主義者」であり，近代平和主義や近代国際主義をその産物であるとしている。

22　例えばロックフェラーを始めとする当時の国際的な金融資本家が共産主義と関わりを持っていたとする研究もある。本稿の範囲を超えるので詳細に論じることは出来ないが，詳しくは筒井（2019）を参照。筒井は以下の様に議論している。

> 1920 年代後半から 30 年代にかけて，共産主義者が深く浸透していたアメリカ・ルーズヴェルト政権や日本の近衛政権とも関係を持ち，中国，ソ連等の共産主義者やコミンテルン要員も多数参加してアジア太平洋地域の情報分析や反日宣伝工作の拠点となった太平洋問題調査会は，アメリカ・ロックフェラー財団から強力な支援を受けていたことである。このことが如実に示すように，国際的な共産主義者の活動は国際金融資本家と密接な関係を持っていたということである。彼らは，特定地域の国や固有の文化や当地の在り方を嫌い，共産主義やニューオーダーといった「普遍的」価値観に立脚して世界を経済的・政治的に支配しようとしている点で共通している。（筒井 2019 p. 13）

当時のシュンペーターのおかれた状況と，資社民の議論を考えたとき，この話は説得力をもつ。シュンペーターは親日家であり，またの妻のエリザベス・ブーディーは日本産業史の研究家であった。当時彼は当局から共産主義者と疑われ，また妻は潜在的敵国であった日本研究者という事でたびたび家宅捜査を受けたという。こうした問題が『資社民』の形成に重要な意味を持つかもしれない。これら点についてさらに詳細を調べた後，別の機会に論じたい。

23　当時，共和党色の強かったハーバード大学の学生と教員の二人に一人はローズヴェルトのニューディールに反対していた（McCraw 2007 p. 240）。

24　こうしたマルクスの想定は，J. S. ミルの社会主義観に通じるところがあるとする論者もいる。すなわち，その理想とするところにおいて，フェビアンや空想社会主義者，ベルンシュタインなどの思想はやはり，近いところにあったと考える事も出来るかもしれない。

Socialisms of “Evolution” and “Revolution” at the early 20th century.

—Socialist Evolutionism and Schumpeter’s vision.

KOBAYASHI Daisuke

Abstract

This paper examines the tactical conflict between ‘evolution’ and ‘revolution’ debated by German socialists at the turn of the 20th century and considers the role the argument played in Schumpeter’s later book, *Capitalism, Socialism, and Democracy*. The concept of evolution has been used to explain social development since the Enlightenment era. The ‘evolution’ of society was linked with Christian millennium thought and utopianism, and it became a thought that indicated ‘purposefulness’ of pursuing ideals. After the advent of Darwinism, the word came to be used among socialists as a term for gradual progress aimed at socialization. While moderate socialists aim for socialization through a democratic process, activists make violent ‘revolution’. In the early 20th centuries, this dyad of ‘evolution’ and ‘revolution’ developed to tactical conflict within the German Social Democratic Party.

Schumpeter’s *Capitalism, Socialism, Democracy* is considered to have had such a scheme of conflict within the German Social Democratic Party as a background knowledge. While he formulated the revolutionary innovation of entrepreneurs as a process of ‘economic evolution’ in *Theory of Economic Development*, he seemed to regard the trend toward socialism as a process of evolution of capitalism in *Capitalism, Socialism and Democracy*.